

AEON MAGAZINE

For a Sustainable World

93
2026.06



ネイチャーポジティブ

Nature Positive

CONTENTS

2 特集「Nature Positive」

- ▶ めぐみといたみ
- ▶ まもる
- ▶ はぐくむ
- ▶ かんがえる
- ▶ ひろげる

14 サステナVALUE

トップバリュ「やさしごはん」シリーズ

16 ミライをつくるご当地WAON

長野県 / 日本アルプス

18 和文化人

いかご / 須浪 隆貴さん -前編-

19 黄色いレシートのその先へ JiMotto!

富山県 / ガイア自然学校とやま

20 ParaSpo ZOOM

デフバドミントン /
矢ヶ部 紋可さん、矢ヶ部 真衣さん

表紙のモチーフ〈ペンギン〉
制作 / 海ゴミアーティストあやお

美しい地球で生きるために、
海で拾ったゴミだけで海の生き物を創作。
今号はペンギンを制作していただきました。
<https://ayaogomi.com/>



AEON MAGAZINE June 2026 Vol. 93

発行日：2026年5月27日

発行所：イオン株式会社
コーポレート・コミュニケーション部
〒261-8515
千葉県千葉市美浜区中瀬1-5-1
TEL：043-212-6061

ホームページ： <https://www.aeon.info/>
※本誌の一部を抜粋した英語版、中国語版を
下記ホームページよりご覧いただけます。
英語版 <https://www.aeon.info/en/>
中国語版 <https://www.aeon.info/cn/>

本誌上における社外からの寄稿や発言は、
必ずしも当社の見解を表明するものではありません。

この冊子はイオンの情報誌です。
AEON(イオン)はグループの総称です。



生態系の回復と
人の営みは
両立できるのだろうか？

特集

Nature Positive

美しい自然と私たちの暮らしを守るために。
今できることを考え、行動して、答えを探していく。

今、地球上の種の絶滅は、驚異的な速さで進行しています。
私たちの生活は、動植物だけでなく水や空気、土壌など
さまざまな自然の恩恵を受けており、生態系のバランスが崩れることで、
日常生活にも大きな影響を与えると危惧されています。
もはや生態系や自然環境を守るだけでは間に合わない。
マイナスをゼロにするのではなく、プラスに転換していくこと
世界的な目標として掲げられているのが「ネイチャーポジティブ」。
生物多様性の損失を食い止め、まずは2030年までに
自然を回復軌道に乗せることを目指しています。

では、ネイチャーポジティブの達成のために、私たちに何ができるのでしょうか。
大切な食文化をこれからも守っていききたい。自然の中で過ごす気持ちよさを感じたい。
何かをひたすら我慢するのではなく、生態系の回復と人の営みを両立できるよう
考え、行動していくことがとても重要になってきています。
今号の特集では、この両立を目指すさまざまな人の思いと取り組みをご紹介します。
イオンの活動も合わせて、今私たちができることを一緒に考えてみませんか。

苗を植え、木を育てる。 森と暮らしが寄り添うところに、里山は生まれる。

さまざまな樹木が生い茂り、美しいみどりのグラデーションが広がる宮崎県の「綾町イオンの森」。県のほぼ中央に位置する綾町は、2012年にユネスコエコパークに登録されたほど、日本最大規模の照葉樹の自然林が広がる独自の生態系を誇っています。

綾町イオンの森の場所は以前は杉林で、老朽化した地元の中学校校舎の建て替えのために杉の木を使うことになり、伐採した跡地を里山にすることを計画。そして2013年、(公財)イオン環境財団の協力のもと植樹が行われました。「地元の中学生をはじめ、およそ500人が集まって5000本の苗木を植えました。以降2022年までに約2万4千本の植樹を行い、苗から木へ、育樹し、森へと皆さまとともに豊かな自然環境に回復させてきました」と話すのは、イオン環境財団の山本百合子専務理事。イオン環境財団は大学や自治体と連携し、森づくり(植樹)・環境教育・地域活性化の3本柱で「持続可能な里山・地域づくり」に取り組んでおり、早稲田大学と共同で設立した

「AEON TOWAリサーチセンター」もその活動のひとつ。綾町イオンの森をはじめとするさまざまな地域の里山づくりを、AEON TOWAの大学生が地域の人々とともに進めています。

2024年には綾町イオンの森と隣接する「割付地区の日向夏畑」が環境省の自然共生サイトに認定。この自然共生サイトとは、民間の取り組みなどによって生物多様性の保全が図られている区域を指します。「綾町イオンの森に植樹したヤマザクラなどの花木がミツバチを引き寄せ、そのミツバチが日向夏の花の受粉を支え、収穫量の増加につながりました。養蜂にも力を入れ、多様な生態系によるさらなる恵みが育まれることを期待しています」と山本専務理事は笑顔を見せます。

イオングループ全体で取り組む「イオンふるさとの森づくり」による累計植樹本数は約1284万本※。東日本大震災の被災地をはじめ、林野火災で焼損した地域など、特に紛争や災害で失われた場所での植樹は「悲しい場所

終わらせない」という強い思いを込めてきました。「自然は豊かさの根源であり、平和の象徴です。今なお戦争が続く状況だからこそ植樹を続けていかなければならない。自治体や研究機関、環境NPOなどと連携しながら人と自然が共生するこれからの里山づくりに積極的に取り組んでいきます」と山本専務理事。イオンは35年以上、1本そして1本、地域ボランティアの皆さまとともに変わることなく木を植え続け、これからも継続していく。それは自然がもたらす大いなる力を信じた、平和への種まきなのだと言います。



公益財団法人イオン環境財団
山本 百合子 専務理事兼事務局長

1988年、ジャスコ株式会社(現イオン株式会社)入社。青森店配属。秘書、人事、採用業務などを経て、沖縄ジャスコ開業プロジェクト、イオンタワー本社移転プロジェクトなどに携わる。2014年、公益財団法人イオン環境財団事務局長。2020年より現職。

失われた 地に、心に、 平和への種まき。 はぐくむ



持続可能な地域社会の実現を目指す
早稲田大学との共同研究機関。

「AEON TOWAリサーチセンター」

「AEON TOWA」とは、イオン環境財団と早稲田大学が共同で設立したリサーチセンター。里山をフィールドに、学生が地域と向き合いながら、環境と社会の持続可能性を、現場での実践を通して探究しています。綾町イオンの森では、AEON TOWAの学生が地域の人々とともに、針葉樹伐採後の地形や水脈を活かし、ビオトープづくりなどに取り組んでいます。現地での継続的な観察を通じて動植物の回復を見守り、地元の猟友会との連携は獣害対策の調査へと発展。こうした実践は、修士学生の研究にもつながっています。

今、自分たちが
環境のために
何ができるかを

かんがえる



トラウデン 直美 さん

1999年4月生まれ。京都府出身。慶應義塾大学卒業。「2013ミス・ティーン・ジャパン」でグランプリを受賞。13歳で小学館のファッション雑誌「CanCam」の史上最年少専属モデルとしてデビュー。雑誌やファッションショーのほか、報道・情報番組でも活躍中。

自然のすばらしさを失いたくない。
環境教育から得た学びと実践。

子どもの頃から外遊びが好きで、家の裏の山や神社など、自然の中でよく遊んでいました。高校へ進学してからは環境に関する授業を積極的に受け、生物多様性やパーマカルチャー[※]などを学び、ドイツでのフィールドワークにも参加しました。この頃に、こんなにも親しんできた自然が、私の子どもや孫の代までちゃんと残っているのだろうかという危機感を抱いたことをよく覚えています。特に衝撃を受けたのは海洋プラスチック問題。プラスチックゴミが大量に海へ流出し、生態系や人体、経済に深刻な影響を与えていることにとても驚きました。普段目に見えていない問題はほんの一部で、見えないところにこそたくさんあり、そして深刻な問題が潜んでいるのだと感じました。

その一方で、ドイツでのフィールドワークでは、人が森に手をかける必要性を学んだり、先進的な太陽光パネルなどを目にして、現地の人が前向

きに環境問題に取り組んでいることにとても共感しました。環境問題を悲観するだけでなく、何かできると信じて希望を持って取り組んでいくことが大事だと。私も「できること」を楽しく続けていこう、きつとそれが一番の方法なのだと心に決めた出来事でした。

現在は、マイボトルの利用のほか、買物は環境に優しい商品を意識的に選び、洋服は気に入ったものを長く着るようにしています。次々と新しいものを買って消費することに、あるときむなしさを感じたんです。持っているのは同じようなものばかりで、捨てるにも罪悪感を感じる。これは無駄なことをしていると反省し、本当に必要なもの、好きなものを考え、選ぶようになりました。

今、レギュラー出演している番組で学んでいるのが野菜づくり。月に一度畑に通って、人間と自然の共生のあり方を考えながら、土の力、植物の生きる強さ、そして生物多様性の大切さを肌で感じているところです。ネイチャーポジティブ[※]については、その重大さを理解するとともに、正直、疑問を感じることもあります。自然はとても繊細なバランスで成り立っています。そんな自然

環境を、本当に人の手が入ることでもとの姿に戻せるのだろうか。そのために失うものもあるのではないかと……。そんな葛藤が私の中に芽生えているのは事実です。私自身、野菜栽培で思い通りにならないことがあると、つい私たち人間の都合を優先させてしまいがちになります。でも本来は手間や時間がかかってもできるだけ自然の声を聞き取り、あるべき姿を尊重しながら育てていくほうが良いはず。自然にも人にも良い方法を探り、考え続けていくことがネイチャーポジティブの実現のために大事なのだと思っています。

その良い方法を見つける鍵は、コミュニケーションにあるのではないのでしょうか。例えばお買物のときに、環境に優しい商品の情報をパッケージで知り、購入することもコミュニケーションのひとつの形で、投票をするような行為だと感じています。その商品を気に入れば周りに伝えて行動を広げていくこともコミュニケーションですよね。小さなことでも日々の気付きを共有しながら、新しいアイデアや情報を取り入れて生活に活かす、そのような輪を広げることから、ネイチャーポジティブに貢献できればと思います。

[※] 自然のシステムを参考に、人と自然が共存する持続可能な生活・社会をデザインする手法



地域の皆さまとともに さまざまな 活動を ひろげる

イオンは、店舗を基点に地域とともに事業を展開している企業として、これまで事業活動に伴う生物多様性への影響を低減し、保全を進めることを基本に取り組んできました。このたび、生物多様性に関する新方針を策定し、「めぐみ」の最大化と「いたみ」の最小化の両立を図るとともに、生態系の回復に主体的に関与する取り組みへと進化させていきます。



自然の恵みと暮らしの循環を目指す、「イオンの里山プロジェクト」始動。

人が自然と関わり続けることで維持され、私たちの暮らしに多様な「生態系サービス」*をもたらしってきた「里山」。しかし、近年の気候変動や生物多様性の損失により、地域の豊かな里山の営みは失われつつあります。イオンはこの現実に向け、自然を「守る」だけでなく「活かし」、自然と人々の営みが支え合い持続的な発展を目指す「イオンの里山プロジェクト」を開始。今年の4月2日に目指す里山の姿を明示するとともに、豊かな自然環境を誇る千葉県多古町と地域連携協定を結び、里山と生活圏をつなぐ新しいモデルの構築を進めています。自然の恵みを暮らしに取り入れ、その恩恵への感謝と思いを表す活動がまた自然を育てる。この循環を、拠点となる店舗を通じて全国に広げていきます。



地域の子どもたちを交えた、桜の記念植樹の様子。



活動拠点となる「旧興新小学校」にて、多古町の皆さまとイオンの関係者で記念撮影。

* 多様な生物が関わり合う生態系からの恵みのことで、主に「基盤的サービス」「供給サービス」「調整サービス」「文化的サービス」の4つがある。(環境省ネイチャーポジティブポータルより)

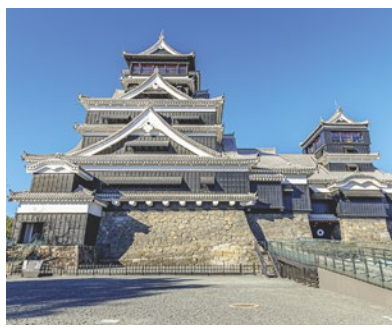
知見とビジョンを共有し、
共創のあり方を議論する
国際会議に協賛。

グローバル・ ネイチャーポジティブ・ サミット2026

ネイチャーポジティブの実践に向けた共創のあり方を議論する「グローバル・ネイチャーポジティブ・サミット2026」が、今年7月、熊本県熊本市で開催されます。民間企業や金融機関、地方自治体、研究者など国内外の関係者が集い、基調講演やテーマ別セッション、展示などを通じて、知見の共有および共創の具体策を議論します。イオンは本サミットに協賛し、ネイチャーポジティブに関する国際的な議論に参画。行動の成果の最大化を目指してさまざまな知見を集め、サミットの4年後、2030年の自然再興の実現に向けて取り組みを加速します。



会場／ 熊本城ホール
〒860-0805 熊本県熊本市中央区桜町3-40
会期／ 2026年7月14日(火)・15日(水)
※16日(木)に体験型の見学会「エクスカーション」を予定
主催／ Nature Positive Initiative (NPI)、
国際自然保護連合日本委員会 (IUCN-J)
共催／ 一般社団法人 イクレイ日本、環境省、農林水産省、
国土交通省、サミット発起人組織委員会
協力／ 株式会社日経BP



地域に豊かな自然の実りを。 「イオン ふるさとの森づくり」35周年。

かつて自然と人間の共生の象徴であった「鎮守の森」。地域本来の自然植生が残る貴重な森を現代に復活させるべく、イオンは1991年10月に地域の皆さまと植樹を行う「イオン ふるさとの森づくり」をスタートしました。国内外のショッピングセンターを中心にした植樹活動の参加者は現在、のべ約129万人*。植樹された約1,284万本*の苗は今、豊かな森へと育っています。今年35周年を迎え、ネイチャーポジティブのさらなる実現に向けて、「国際的な発信の強化」「都市における自然再生の実証」「地域との共創による里山の再生・活用」のアクションを推進し、自然の回復という持続的で豊かな実りを地域にもたらししていきます。

* 2026年2月末時点



ショッピングモールでの植樹に参加していただいた地域の皆さま。



「綾町イオンの森」での育樹活動の様子。



1

①トップバリュ「やさしごはん おこめとおからでつくったクッキータイプ ココア」②トップバリュ「やさしごはん まろやかチョコレート」③トップバリュ「やさしごはん パリッとモチリした 無えんせきウインナードッグ」

突然の「おなかすいた！」に サッと出せる冷凍食品も登場。

お米を原料にした、ふわふわのホットケーキやクリーミーなグラタンなどの商品を食べたお客さまから届く、「やっとお食べられた！」「こんな味だったんだ」といったお喜びの声が励みとなり、商品の拡充に意欲を高めてきた館担当。さらにお客さまからのニーズに応え、多彩な商品を提供してきました。共働き家庭の増加に伴い、2024年には即食に対応した冷凍食品シリーズも登場。「製造委託先さまには、アレルゲン※2が意図せず混入するコンタミネーションの防止をはじめ、イオン独自の厳しいルールを順守いただいています。実際の製造に至るまでには時間がかかりましたが、念願だった冷凍食品がようやく揃いました」。子どもが「おなかすいた！」と言ったときにも電子レンジで温めるだけで食べられる豚まんやウインナードッグ、生チョコのような本格的なテリーヌも冷凍技術によって可能となり、やさしごはんの商品は今、多くの売場で展開しています。

「発売当時は子どもの食物アレルギーを表に出さない風潮を感じていましたが、世の中の認知と理解が広がった今ではオープンになってきたと思います。子ども自身も食べてはいけないものを自覚し、正しく選んで毎日を過ごす。その食べる『選択肢』を広げていくことも、私たちの役割なのだと受け止めています」と語る館担当。食物アレルギー対応食品の開発にかかる責任はとても重い。けれどもお困り

の方がこれほどいる以上、自分たちがこのシリーズを止めるわけにはいかないと続けてきた10年間。これからも家族や友だちと一緒に同じものを食べる楽しさや幸せをさらに広げていきます。

イオントップバリュ株式会社
商品開発本部 特命担当
館 克頼



2



3

特定原材料を避ける大変さからの解放も 「やさしごはん」の役割。

特定の食品を摂取するとじんましんなどの症状が出たり、さらに重篤なアナフィラキシーが起こると意識障害など命に関わることもある食物アレルギー。未就学児の有症者は増加傾向にあるとされ、それだけ食物アレルギーに向き合いながら、子どもの日々の食事を工夫している家庭も増えています。

「私の子どもが食物アレルギーだったことから、食べてはいけないものを避けて食事を用意する大変さを身に染みて感じていました」と話す館担当。パッケージに表示されている成分を一つひとつチェックすることや、代替品を使って献立を考えることなど、子どもが毎日飽きずに食事を楽しめるようにと、かけた手間と時間は相当なものだったと振り返ります。館担当は「やさしごはん」の開発当初から、この日々的大変さから少しでも解放でき、そして何よりも子どもたちに食べる楽しさや喜びを感じてほしいと考え、「食物アレルギーの子を持つ親の会」の皆さんに協力を依頼。子どもが食べたくても食べられないものは何か、どんな味を好むかなど、定期的に意見を交わし、食物アレルギーの子どもを持つ家庭にとって価値のある便利さとおいしさを追求してきました。

〔左から〕トップバリュ「やさしごはん おこめでつくったミックス粉」/ トップバリュ「やさしごはん 生地がもちもち豚まん」/ トップバリュ「やさしごはん 濃厚ココアのなめらかテリーヌ」/ トップバリュ「やさしごはん 野菜と米ビュレでつくったカレー」/ トップバリュ「やさしごはん おこめでつくったスパゲッティ風」/ トップバリュ「やさしごはん おこめでつくったレーズンパン」



©Disney



おいしいは たのしい。

「一緒に、なんだかうれしい
いただきます」の時間。

特定原材料8品目※1を使用しない、イオンのプライベートブランド「トップバリュ」による食のシリーズ「やさしごはん」。2016年の発売以来、食物アレルギーのお子さまを持つご家庭からたくさんのお喜びの声が寄せられてきました。食物アレルギーがある子どもたちにも、食べる楽しさを感じていただく商品を拡充してきたやさしごはんのこれまでの10年について、館担当から話を聞きました。

※1 食物アレルギー症状を引き起こすことが明らかになった食品のうち、特に発症数、重篤度から勘案して表示する必要性の高いものとして表示が義務化されたもの。卵、乳、小麦、くるみ、えび、かに、そば、落花生
※2 アレルギー原因物質



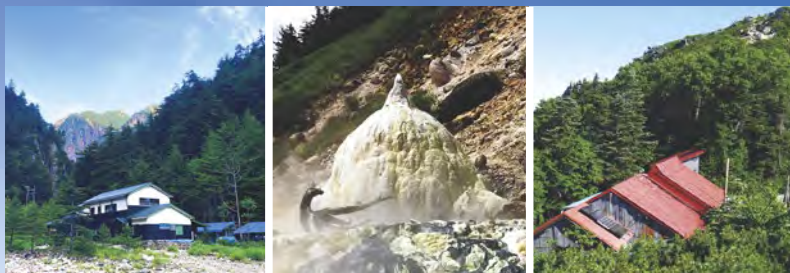
道を、山を、 強くする 確かな一歩。

雄大な自然を感じ、頂へ。
登山客を魅了するこの山の
変化と、私たちができること。

北は飛騨山脈、中央は木曽山脈、南は赤石山脈からなる「日本アルプス」。標高3000メートル級の稜線が続く長野県大町市には、主に表銀座・裏銀座・後立山連峰縦走の3つの多彩なコースがあり、多くの登山客を惹き付けています。その魅力はなんと、いつでも独自の自然環境。低地から高地へと移り変わる

多種多様な植物に高瀬川沿いの溪谷、野趣あふれる岩肌が織りなすダイナミックな景観に加え、夏には標高2500メートル以上に高山植物の花畑が広がります。

山岳ルートの山小屋を営む「湯俣温泉 晴嵐荘」の竹村正之さんと「鍋鬼岳小屋」の伊東裕さんは、毎年7〜10月ごろに山小屋で登山客を迎えながら、登山道の整備にも携わります。「この山のルートはここを熟知した先人たちが安全性と合理性を考えて開拓したもので、この道をそのまま活かすことが人と自然の安全と共生を守る一番の方法だと考えています」と竹村さん。しかし近年の気候変動で明らかな変化が起きていると伊東さんは続けます。「以前は山頂付近には初夏でも雪が残っていた、整備のために雪かきが必要なほどでしたが、最近はそのまで見かけません。暑さも厳しくなり、突然の豪雨も多くなりました。沢が一気に増水して小屋までの道中にある橋が流されたこともあります」。同様の経験は竹村さんにもあり、その際は橋の再建に4年もかかったのだとか。橋が落ちると山が孤立し、山全体のつながりが絶たれてしまう。そのため橋の修復を含む「道」を守ることに尽力していると2人は言います。「山の道を守る方法のひとつが、登山客の皆さんに歩いてもらうこと、そしてこの現状を知ってもらうことです。人が一歩一歩、土を踏み固めることで道は確実に強くなります」。続けて伊東さんは「日本アルプスには手付かずの自然が残っています。最低限の人工物しかない環境で、歩いて登って、岩場や沢を越えて精一杯進むうちに、感覚が研ぎ澄まされていく。汗を流して自分と向き合い、頂上にたどり着く達成感を感じる。そういった、いつの時代も人を魅了してやまない登山の良さを経験してほしいと思います」。ゴールを目指す一人ひとりの歩みが道を、山を守る。一員なのだと教えていただきました。



【左】本格的な登山だけでなく、温泉やキャンプ泊の用途でも人気の晴嵐荘。小屋に続く川はジップラインで渡河できるようになっている。【中央】晴嵐荘近隣で見られる天然記念物「噴湯丘」。源泉の成分が長い年月をかけその場に堆積し“育つ”希少な現象。【右】鍋鬼岳小屋と山頂。北アルプス裏銀座を一望するコースを進み、ひと登り終えたあとに食べる名物のちらし寿司は絶品。



【左】鍋鬼岳小屋の伊東さんと、【右】湯俣温泉 晴嵐荘の竹村さん。「登山は事前準備が大切。長野県公式HPの山岳情報ページを活用し、特に下山時の道迷いには気をつけて楽しんでください」と伊東さん。



ご当地WAONは、ご利用金額の一部をイオンが自治体などに寄付し、地域の活性化にお役立ていただけるWAONカードです。2026年4月末現在、199券種を発行しています。カード型電子マネーWAONもしくはスマホからのWAONおよびAEON Pay (チャージ払い)にてご利用いただけます。

信州アルプスWAON



発行元:イオンビッグ株式会社



発行元:イオンリテール株式会社

全国どこでご利用いただいても、ご利用金額の一部が、長野県の美しく豊かな自然環境と魅力的な景観づくりを応援します。贈呈された寄付金は、老朽化した登山道の整備(写真下)のほか、登山道のお手洗い、道標の整備に活用されています。



日本アルプスに隣接する御嶽山の登山道の整備例。



ご当地WAONは2026年3月24日、『電子マネーの寄付金プログラムで提携している自治体数の記録』※“提携自治体数193”としてギネス世界記録®に認定されました。

※正式記録タイトル
(英) Most municipalities partnered in a regional e-money card donation programme
(日) 電子マネーの寄付金プログラムで提携している自治体数の記録

祖母の技を受け継いだ、
ずっと長く愛用されるものづくり。

岡山県南部に広がる干拓地では、江戸時代から「イグサ」の栽培や畳表などの生産が盛んでした。なかでも倉敷市は、染色したイグサを織り込んでつくる「花ござ」の発祥地として栄えましたが、1970年ごろからは環境や生活様式の変化などにより、イグサ農家もイグサ産業も急速に衰退。須浪隆貴さんが5代目となる須浪亨商店も、20年ほど前に家業としていた花ござ製造を止め、現在はイグサの籠「いかご」をつくっています。



いたそうです。「今でも年季の入ったいかごの修理を頼まれることもあります。それらはほぼ祖母がつくったもの。長く大切に使ってもらえている嬉しさと同時に、祖母とのつながりを改めて感じます」。

勉強や仕事の合間に手伝っていたいかごづくりが、「何よりもおもしろいし、自分の性に合っている」と、21歳で専業に。「祖母から学んだのは、淡々としたものづくりに打ち込む職人としての姿勢。イグサの特性や伝統製法を活かしながら、時代に合うサイズ感や編み方などを工夫し、長く愛用されるものづくりにこだわっていきたく」と思っています。年月とともに、イグサのみずみずしい緑色が茶系に変化し、しなやかに手になじんでいくのは、いかごならではの魅力。おばあさまから受け継いだ技術も、隆貴さんの中で深みを増していきます。



「上」イグサの緑色がすがすがしい香り残る、完成したばかりのいかご。定番の手提げ籠は、丈夫でとても軽いので、幅広い用途に使える。
「左」いかごだけでなく、イグサを用いた鍋敷なども製作。デザイン性と実用性を兼ね備え、現代の暮らしにも調和する人気アイテム。



いかご作家
須浪 隆貴さん
Ryuki Sunami

1993年、岡山県倉敷市生まれ。1886年創業の須浪亨商店5代目。子どもの頃からものづくりが好きで、専門学校ではジュエリー制作を学ぶ。21歳のとき、会社勤めの傍ら続けていたいかごづくりを本格的に始動。日本で唯一のいかご作家として、その作品や活動は国内外から広く注目を集めている。

<https://maruhyaku-design.com/>

Event information

個展 須浪 隆貴
場所：月白（パラスパレス 近江八幡店）
〒523-0883 滋賀県近江八幡市北元町9
TEL:0748-43-2707
会期：2026年5月23日（土）～6月7日（日）
火曜定休（火曜が祝日の場合は翌日休み）
営業時間：11:00～19:00 入場無料
※詳しくはインスタグラムにてご確認ください。

<https://www.instagram.com/sunaaaaaaami/>

黄色いレシートの
その先へ
Jimotto!

富山県

NPO法人

ガイア自然学校とやま

自然体験活動を通じて子どもの心身を育む「ガイア自然学校とやま」は、2007年に設立されました。川と森に囲まれた、自然の真ん中に立つ手作り小屋を拠点に、平日通園型の認可外幼稚園や小・中学生向けの週末キャンプなど、さまざまなプログラムを行っています。

ここでの一日は、子どもたち自身が「今日したいこと」を考えることから始まります。「川に飛び込みたい!」「森で一番高い木に登りたい!」「洞窟を探検したい!」など、一人ひとりの声をできる限り尊重したうえで安全面を確認。続いて班をつくり、一人ひとりが好きな場所で好きなことをして遊びます。夏には冷たい川の水に驚いたり、木は登るより下りるほうが難しいと感じたりと、自然の遊びは子どもたちにとって想定外の連続。仲間の遊びに参加してみたら思いのほか楽しかった、ということも大きな発見です。代表の守屋謙さんは、「自己主張が苦手な子どもも、自由に遊びを楽しむ仲間の様子を目にするだけでチャレンジ精神が刺激される」と言い、何をして遊ぶか自分で決める大切さをこう話します。「子どもたちが将来、幸せに生きていくには、『どう生きていきたいか』を自分で考え、自分で選んだ道を歩んでいる実感が必要だと考えています。『今日、何をして遊びたいか』を考えるのは、そのための第一歩。自然を相手に思い通りにいかないことも経験しながら、できることを自分で見つけ、増やし、やりたいことを自分で選ぶという主体性を身に付けてほしいのです」。

遊びを通じて、自分の興味や好きなことに気付いていく。仲間との協働のなかで、得意・不得意がわかってくる。子どもたちは今日も大自然に見守られながら、たくさんの「やりたいこと」にチャレンジしています。

守屋 謙 代表

救急用品や熱中症予防の塩分タブレットなど、安全管理のための消耗品などに寄付を活用しています。



今日は何して遊ぼうか。
子どもたちが考え、
決める自然の教室。



海の生き物を観察したり、遠く屋久島までキャンプに出かけたり。何十もあるプログラムは、子どもたちの「やってみたい」という声や、スタッフたちの「こんなのおもしろそう」というアイデアから生まれたものばかり。



スタッフは富山大学の専属学生ボランティア。現場では、子どもの半数程度のスタッフを配置することで、一人ひとりがやりたい遊びを尊重し、細かく目配りできる環境を整えている。



じぶんの買物でだれかを幸せにするしくみ。
イオン 幸せの黄色いレシート
since 2001

毎月11日の「イオン・デー」にレジで発行される黄色いレシートを、応援したい地域の団体のBOXに投函。集まったレシートの合計金額の1%相当の品物をイオンが該当団体に寄贈します。支援が必要な団体と、応援したい地域のお客さまをつなげる仕組みです。



Deaf Badminton: Strong Bonds and Trust Take Two Sisters to the Top

Without sound, every move demands sharp observation and split-second judgment.

The sound of the shuttlecock being struck, the racket cutting through the air, partners calling out to each other... Badminton is a sport played by relying on all kinds of sounds. Deaf badminton, however, is played by athletes who are deaf or hard of hearing, so sight and intuition are everything. Players need sharp observation and split-second judgment to read the shuttlecock and their opponents' movements.

Standing at the top of the world in this sport are the Yakabe sisters, Ayaka and Mai. They have played doubles together since 2021 and have competed on the world stage. At the TOKYO 2025 DEAFlympics held in fall 2025, the first time the event was hosted in Japan, they won gold medals in both the women's doubles and the mixed team events.

Older sister Ayaka started the sport in her first year of elementary school, after being invited to join a club at her school for the deaf. Inspired by how much fun her sister was having, younger sister Mai joined the same club at age five. After competing in the 2021 Deaflympics, she began to take the sport seriously.

Using deaf sports as a bridge
toward a society where people with and without
hearing impairments can thrive together.

"My sister is good at offense, and my strength lies in my tenacity. The synergy of our different styles means we make very few mistakes, and that is our weapon," says Ayaka. In deaf badminton, where rallies are long, steady and mistake-free play strongly draws victory closer. The sisters look back on the July 2023 World Deaf Badminton Championships as their most frustrating moment. They finished in the top eight, and Ayaka moved from Fukuoka to Tokyo for work, seeking an environment where she could grow stronger. Even while living apart, they stayed in close contact and kept training, and those days led to this recent achievement.

"I want to give dreams to children who aspire to play deaf sports," says Mai. Ayaka adds, "I want deaf badminton to be a starting point for an inclusive society. I would be happy if our example encourages people to try learning sign language, or to reach out to someone in need." The sisters believe that the image of them competing will one day help change society. With that thought in their hearts, they continue to move forward with strength.

聋人羽毛球：深厚的纽带与信任 姐妹携手，共同登顶世界之巅

没有声音的辅助，就更需要对动作的精准观察力和瞬时判断力。

击球声、球拍划破空气的声音、搭档的呼喊声……羽毛球是一项依靠各种“声音”进行的运动。而专为听障选手设计的聋人羽毛球，则完全依靠视觉与直觉。这就要求选手具备敏锐的观察力和判断力，以精准捕捉羽毛球与对手的动向。

矢部纹可、矢部真衣姐妹便在这项竞技中实现了登顶世界之巅的壮举。她们自 2021 年起组成双打搭档，活跃在世界舞台上。2025 年秋季，在日本首度担任东道主的“2025 年东京夏季听障奥运会”上，这对姐妹在女子双打和混合团体赛两个项目中摘得金牌。

姐姐纹可受聋人学校社团邀请，在小学一年级时开始接触这项运动。被姐姐的快乐所感染，妹妹真衣也在 5 岁时加入社团。自参加 2021 年听障奥运会起，她开始认真对待这项运动。

以聋人体育为契机，构建健全人士与听障人士共生的社会。

纹可告诉我们，“妹妹擅长进攻，我则以韧性见长。这种个性上的互补帮助我们减少了失误，这也是我们的制胜法宝”。在回合持续时间较长的聋人羽毛球比赛中，这种零失误的稳定发挥为胜利奠定了坚实的基础。二人回顾起来最遗憾的，是 2023 年 7 月的世界听障羽毛球锦标赛，当时她们遗憾止步八强。为了寻求增强自身实力的环境，纹可借着工作的机会从福岡来到了东京。虽然分隔两地，但姐妹二人依然保持着密切的联系，日复一日地刻苦训练，最终赢得了这次酣畅淋漓的胜利。

真衣希望“为立志从事聋人体育运动的孩子们传递梦想”，纹可则表示“希望将聋人羽毛球变为构建共生社会的契机”。她补充道：“希望这项运动能带动大家行动起来，比如尝试学习手语、向遇到困难的人伸出援手等等。”姐妹二人坚信，自己投身运动的精神终将改变社会。而她们也将带着这份信念坚定前行。



Interview with a para-athlete
采访残奥会运动员

ParaSpo ZOOM

知るほどに面白い!

強い絆と信頼。 姉妹でつかみ取った 世界の頂点 デフバドミントン

デフバドミントン選手

矢部 紋可 さん(姉)

矢部 真衣 さん(妹)

福岡県出身。紋可さんは2002年、真衣さんは2004年生まれ。2人は幼少期に聴覚障がいが発覚し、デフバドミントンを始めた。2021年からダブルスのペアを組み、日本代表として世界大会に出場。東京2025デフリンピックでは女子ダブルス、混合団体戦ともに金メダル。紋可さんは株式会社ゼンリンデータコム所属。真衣さんは筑紫学園大学在学中。

Deaf Badminton Athletes

Ayaka Yakabe (older sister)

Mai Yakabe (younger sister)

Both from Fukuoka Prefecture, Ayaka was born in 2002 and Mai in 2004. Both were diagnosed with hearing impairments in early childhood and took up deaf badminton. Since 2021 they have played doubles together and represented Japan in international competitions. At the TOKYO 2025 DEAFlympics, they won gold medals in both the women's doubles and the mixed team events. Ayaka is employed by Zenrin DataCom Co., Ltd. Mai is currently a student at Chikushi Jogakuen University.

聋人羽毛球运动员

矢部纹可(姐姐) 矢部真衣(妹妹)

日本福岡县人。纹可生于2002年，真衣生于2004年。二人均在幼年时被确诊为听力障碍，并由此开始接触聋人羽毛球。自2021年起组成双打搭档，代表日本征战世界大赛。在2025年东京夏季听障奥运会上，姐妹二人一举斩获女子双打和混合团体赛两个项目的金牌。目前，纹可隶属于Zenrin DataCom Co., Ltd.，真衣则就读于筑紫学園大学。

「音」に頼れないからこそ、
動きを見極める観察力と
瞬時の判断力が求められる。

シャトルを打つ音、ラケットが空気を切る音、パートナーの掛け声……。バドミントンは、さまざまな「音」を頼りにプレーするスポーツです。その一方で、聴覚障害をもつ選手たちが挑むデフバドミントンは、視覚と感覚が全て。シャトルや相手の動きを見極める鋭い観察力と判断力が求められます。

そんな競技で世界の頂点に立ったのが、矢部紋可さん・真衣さん姉妹です。2021年からダブルスのペアを組み、世界を舞台に活躍。2025年秋、国内初開催となった「東京2025デフリンピック」では女子ダブルス、混合団体戦の2種目で金メダルを獲得しました。

姉の紋可さんが競技を始めたのは小学1年生の時。ろう学校のクラブに誘われたのがきっかけでした。姉の楽しそうな姿に憧れ、妹の真衣さんも5歳でクラブに入部。2021年のデフリンピック

デフスポーツをきっかけに
聞こえる人と聞こえない人が
共生できる社会へ。

出場を機に、競技に真剣に向き合うようになりました。

「妹は攻めが得意で私は粘りが持ち味。この個性の相乗効果でミスが少ないことが私たちの武器です」と話す紋可さん。フリーが長く続くデフバドミントンでは、ミスのない安定感のあるプレーが勝利を強く引き寄せています。2人が一番悔しかったと振り返るのが、2023年7月の世界デフバドミントン選手権大会。ベスト8に終わる、紋可さんは「強くなる環境」を求め就職を機に福岡から東京へ。離れていても密に連絡を取り合い、練習を重ねた日々が、今回の快挙につながりました。「デフスポーツを志す子どもたちに夢を届けたい」と真衣さん。紋可さんは「デフバドミントンを共生社会のきっかけにしたい」と語ります。「手話を覚えてみる、困っている人に手を差し伸べるなど、皆さんの行動のきっかけになれば嬉しいです」。競技に向き合う自分たちの姿が、いつか社会を変えていく。そんな思いを胸に、これからも力強く前へ進んでいきます。

粘り強く、
徹底的に守り抜く!

穏やかな性格の紋可さんは、
粘りのあるプレーが持ち味。

Tenacious and unyielding defense!

With her calm personality,
Ayaka's signature is her tenacious play.

頑強拼搏，严防死守!
纹可性格稳重，以顽强的球风见长。

得意のスマッシュで
思い切り攻める!

真衣さんは負けず嫌いな性格。
姉の守りに対して攻めるプレーが得意。

Attacking fearlessly
with her signature smash!

Mai has a fiercely competitive personality.
Her offense style complements her sister's defense.

凭借拿手的扣杀全力进攻!

真衣好胜心强，擅长配合姐姐的防守发动进攻。